

命名

手帖には、し残したことが、毎月たまってきて、7月中にしなければならぬことが2頁に渡って書き込まれている。もう絶望的としか言いようがない。しかし、なかには気楽で楽しいものもある。「大至急命名」である。

2003年度にカナダのカルガリー大学に客員教授として滞在していた時、友人になったスーの初孫セバスチャンに日本名を付けることである。

カナダでは、子どもの名前を漢字で書いて欲しいと頼まれて、電子辞書をもつて友人の家に行き、よく好みの漢字を探してあげた。漢字の書き方も丁寧に教えておいたが、もう忘れられていることだろう。でも、このセバスチャンは漢字に直すだけではなく、親の期待をこめた日本名を付けてあげなければならない。何しろ、セバスチャンに決まるまで、あれやこれやと5回も決定が覆されたという凝り性一家なので、両親、祖父母の希望

を一つに込めた名前を選ぶのは難しい。おまけに両親と祖父母の意見は一致せず、なかなか決まりそうにない。遅くなったのは私のせいだけではない。

彼らの耳にどのように響くかも重要である。私の名前のショウコは、その響きから、フリティツシュ・コロンビア大学の教授から、愛馬の名前にと頼まれ、使用を許可した。ただし、馬の名前と一緒にいうのは余り嬉しくないもので、正子ではなく翔子と命名しておいた。

カナダでは人間にも命名してきた。カルガリー大学の客員教授用の部屋はドミトリートホテルが一緒になった大きなビルの中にあった。私の部屋は南側が一面窓の家具付きの大きなリビング、2ベッドルーム、冷蔵庫から食器も揃っているキッチンのある2LDK。勿論テレビもビデオもコンピューターも揃ったこの上なく心地よい部屋だった。時間にゆとりをもち、心の大きなカナダの人達は、快く私の研究に協力してくれ、研究生活は快適の一言だった。ある人物を除けばである。その人物は、私が名前を付けた、このビルのマネージャーである。テレビ

の調子が悪くても、インターネットの接続がうまくいかなくても、「明日、チェックする」の返事ばかり。本来なら、彼の指示がないと動けないハウスキーパーのシアノやメンテナンスのジェームズが、気を利かせて仲間を修理に呼んでくれた。まったく役に立たない嫌われ者のマネージャーだが、どういうわけか首にならずスタッフに偉そうに指示をしている。

カナダ人の名前は覚えにくいという理由で私は「Mr. トゥモロー」と彼を名付けた。私にできる唯一の仕返し。彼にいつも悩まされているスタッフ達に、大いに受けて、帰国する頃には、皆が「Mr. トゥモロー」と呼んでいた。現在もその呼び名は続いているとのことである。大成功。

さて、手帖に書かれた用事を処理しなければならぬ。セバスチャンの日本名は、4回生の西岡ゼミの優秀な男子学生の名前からとることにした。「良太、翔太、誠、このどれかにすればきつといい子になります。」佛教大学の保証付きということで、この三つから選んでもらうことにする。

学部長の 手帖から

西岡 正子